

予防歯科学分野の紹介

予防歯科学分野 教授 小 川 祐 司

・はじめに

この度歯学部ニュースにて分野紹介の機会を頂きましたので、予防歯科学分野の活動内容についてご紹介いたします。

・臨床について

予防歯科の特徴的な診療として口臭治療があげられます。近年ではマスク生活による口臭の訴えが増加し、口臭治療のニーズも多様化しています。このため、ガスクロマトグラフィーやオーラルクロマといった精密機器を使用してVSCを客観的に測定し、データに基づいたテーラーメイドの治療を実践しています。

また、う蝕学分野と協力して、う蝕予防管理システムの導入にも参画しています。本システムで

はリスクマネジメントに基づいたメンテナンスを具現化し、生活習慣の改善を含めた包括的なアプローチを可能にしています。これまで約50名の患者さんがう蝕予防管理システムによる恩恵を受けており、さらに多くの患者さんに対応できるよう現在体制を整えています。

・研究について

血液・内分泌・代謝内科学分野と協力し、糖尿病患者への歯周治療が脳梗塞や心筋梗塞に及ぼす影響について、Lox-indexを指標に臨床研究を実施しています。また、平成10年から高齢者コホート研究（新潟高齢者スタディー）を毎年遂行し、口腔の健康が全身の健康に及ぼすメカニズムを多角的に検証しています。研究対象者は開始時点で70歳、昨年度95歳となり、25年間同一の対象者を



予防歯科構成メンバー

追跡している調査は国内外ともにほとんど無いため、研究データの学術的インパクトは大きなものになっています。

・教育について

衛生学（歯学科3年、口腔生命福祉学科2年）、
う蝕学（歯学科3年）、予防歯科学（歯学科4年）、
予防歯科学実習（歯学科4年）を主に担当しています。
予防歯科学実習では学生をテーマ別グループに分け、課題の設定からデータの取得、分析まで学生が主体的に取り組めるプログラムを構成しています。実習の最後にはプレゼンテーションを課し、研究の流れを理解することで問題解決への

実践力向上を目指しています。

・おわりに

当分野では、研究をはじめ多方面の方々との協働を実践・経験することができます。その先には、当分野がWHO口腔保健協力センターである点を生かして国際機関で保健活動に従事したり、国内各行政機関で活躍する道もあります。臨床予防歯科、地域歯科保健、国際口腔保健など広い視野のもとに口腔保健の推進に興味のある方々には、ぜひ当分野の扉を叩いてみていただければ幸いです。



顎顔面口腔外科学分野の紹介

顎顔面口腔外科学分野 教授 富 原 圭

口腔外科は、口腔癌や顎変形症、口唇口蓋裂などの高度口腔疾患を扱うため、歯科の知識のみならず医学的な知識や技術の習得も必要とされます。口腔外科入局後の将来像としては、①口腔外科を学んで開業する、②病院歯科で口腔外科医としての専門性を生かす、③大学病院でより高度な専門性を磨く、といった3つのキャリア形成があります。そのため、入局者のキャリアプランに合わせた教育と指導を行います。

また、当科には、北は北海道から南は沖縄まで国内に広いネットワークがあり、このネットワークを生かして他県の病院での研修も可能です。もちろん、気に入った地域があれば、そのままご当地の病院に就職も可能です。

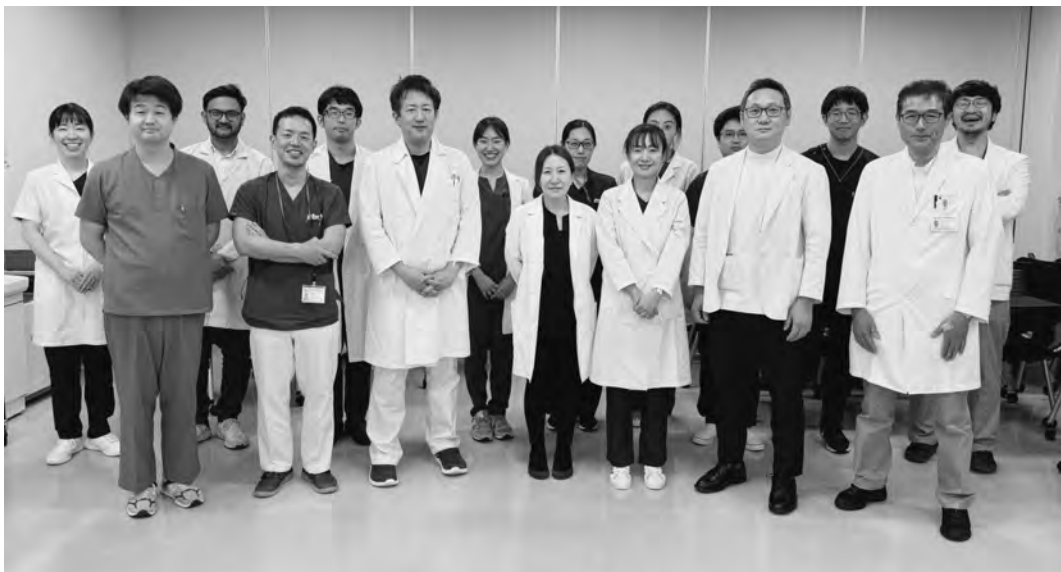
当科ではさらに、国際交流によるグローバル人材の育成にもそろそろ本腰を入れたいと考えております。特にアジア諸国は、日本と比べて症例が多く、短期間で多くのトレーニングを積むこともできますし、アジアにおけるチャリティー手術にも参加できます。

未曾有の少子高齢化、人口減少社会を迎えた我

が国では、歯科医療の需給体制もこれから大きく変化します。歯科を受診する多くの高齢者が、基礎疾患をかかえ、様々な投薬治療を受けています。安心・安全な歯科治療を提供するためには、歯科医師も全身疾患に対する理解が必要であり、最低限の全身管理能力が求められます。

これまで口腔外科は、歴史的にも、時に医科と歯科の争点になり、干渉を受けながらも生き抜いてきた診療科です。しかし、今や医科歯科連携の時代となり、口腔外科は、医科と歯科の大切な接点として、国民の健康増進に貢献しなければなりません。口腔外科は、アナログからデジタルの時代へと技術革新が進み、治療の質が飛躍的に向上してきました。また、AIや情報科学との融合は、新たな診断技術の可能性をもたらしています。

無限の可能性を秘めた口腔外科の将来には、若い英知とパワーが必要です。高度口腔疾患の治療に携わりたい、新しい学問に興味がある、国際交流に積極的に参加したいなど、チャレンジ精神旺盛な皆さんの入局を大歓迎いたします。



令和6年度の教室員